

二松学舎大学人文学会 第一二六回大会 要旨

二松学舎大学人文学会第 126 回大会

- ◆日 時 2023 年 7 月 22 日 (土) 13:00～ (開場 12:30)
- ◆開催方式 対面+講演のみオンライン (YouTube 配信)
- ◆会 場 講演：二松学舎大学 九段キャンパス 1 号館 B2 階中洲記念講堂
研究発表：二松学舎大学九段キャンパス 1 号館 2 階 201/202 教室
オンライン：二松学舎人文学会 YouTube チャンネル (講演のみ)
- ◆備 考 事前申し込み不要・参加費無料

◆プログラム

13:00 開会挨拶

13:05～14:45 研究発表 (各 30 分(発表 20 分、質疑応答 10 分))

産む性の心身両義性 ——川上未映子「乳と卵」論——

文学研究科国文学専攻 博士前期課程修了 初芝 里帆

兼家による『蜻蛉日記』執筆要請の実相 ——上巻冒頭部の検証を通して——

浦和明の星女子中学高等学校教諭 大貫 正皓

幽霊が出現する「状況」はいかに描かれるか

映画『回路』を題材に考える幽霊とメディアとの関係性

国際日本学研究科国際日本学専攻 博士前期課程 2 年 丁 潔

夏目漱石『満韓ところどころ』における「韓」の表記について

文学研究科国文学専攻 博士後期課程 1 年 王 風

唐代中期の季札評

文学研究科中国学専攻 博士前期課程 2 年 三木 啓介

明治期の漢詩人大江敬香について ——その「西詩体」を中心として

文学研究科中国学専攻 博士後期課程 3 年 胡 加貝

15:00～16:30 講 演 《あらい》の時代に夏目漱石を読む

下掛宝生流能楽師 安田 登 氏

16:45～17:30 総 会

【研究発表要旨】

産む性の心身両義性——川上未映子「乳と卵」論——

文学研究科国文学専攻 博士前期課程修了 初芝 里帆

「乳と卵」は、主人公である夏子の東京のアパートへ大阪でホステスをして生計を立てる姉の卷子と、その娘で半年前から筆談で会話をする緑子の二人が訪れ二泊三日を過ごす物語である。大阪弁と標準語を織り込んだ「川上語」とも評される特異な文体により言葉と身体を主題に書き得た作品として高く評価され、第一三八回下半期芥川龍之介賞を受賞した。先行研究においては川上のインタビューでの発言が引用され、他者との関係において〈言葉にできない／示せない〉と言葉で表現することの限界を繰り返し議論されてきた系譜があるが、それは発話で表現される言葉の意味を一義的に取り上げた解釈にとどまっているのではないか。

本発表では緑子の大ノート及び緑子・卷子の母娘関係に注目し、言葉と身体イメージがどのように語られ、またそれらがどのように交錯するかを考察する。

兼家による『蜻蛉日記』執筆要請の実相

——上巻冒頭部の検証を通して——

浦和明の星女子中学高等学校教諭 大貫 正皓

『蜻蛉日記』は、不安定な結婚生活における心の遍歴を記した道綱母の女流日記文学として著名だが、一方で本作は一〇世紀中葉、九条流藤原氏(師輔一門)の私家集や物語の盛行と連動した書として、兼家一門の文化面での優位性を示すべく兼家が道綱母に執筆要請したものと見る見方が存在する。発表ではその実相が天皇に入内した娘の超子(冷泉天皇女御)及び詮子(円融天皇女御)の後宮に向けての執筆要請であったこと、つまり后(娘)や女房に読ませるものとして『蜻蛉日記』が要請された可能性を提示する。

序文、求婚導入場面、求婚発展場面には、従来の貴顕と女性の恋愛交渉には見られない、女性の立場からの貴顕への批判性を有する描写が見られるが、そのような内容は后(娘)や女房により、楽しみながら享受されていたと考える。また、戯画的ともいえる兼家の人物造型の在り方や、時姫腹の超子や詮子が父と道綱母の恋愛模様を綴った日記を読むことの妥当性についても、『枕草子』や『更級日記』の記述を援用し、検証を行なう。

後半は代表的な成立時期推定の先行論にも触れ、その上で超子及び詮子の後宮に提出された想定する本作の、上・中・下巻の提出の実態についても考えていく。

幽霊が出現する「状況」はいかに描かれるか

映画『回路』を題材に考える幽霊とメディアとの関係性

国際日本学研究所国際日本学専攻 博士前期課程二年 丁 潔

近代以降、外来文化やメディア変容の影響を受けた「日本の幽霊イメージ」は、「ホラー」という舞台をつうじて独自のそれを海外へと輸出するに至った。そして1990年代から現在までの「ホラー」の展開をみてみても、幽霊イメージの生成に関与する「メディアウムのレイヤリング」(前川, 2011)は少なからず変容しつつある。

「幽霊」と「メディア」との緊密な関係は、昨今における「ホラー」作品のなかで、様々なかたちで表象されつつある。本研究では『邪願霊』(石井てるよし, 1988年)や『リング』(中田秀夫, 1998年)などを含め、過去数十年にわたる「ホラー」を代表する作品群に触れるなどしながら、そして、さらに主要な分析対象として『回路』(黒澤清監督, 2001年)——デジタルメディア時代の初頭に公開された本作品では、インターネットを介して現前する幽霊が登場人物の日常的な「状況」を脅かす様子が描かれる——を分析するなどしながら、それらの映画において幽霊が出現する「状況」がいかに演出されているのかに注目する。そして現代的なメディア環境における幽霊表象の変化と、その文化的意味の変容を考えつつ、デジタル時代における「幽霊」と「メディア」との関係性を究明していくことを目的とする。

夏目漱石『満韓とところどころ』における「韓」の表記について

文学研究所国文学専攻 博士後期課程一年 王 風

一九〇九年九月から十月、約一ヶ月半の日程で、夏目漱石は中国東北地方と朝鮮を旅行した。漱石が帰国した十月二十一日から十二月三十日まで、その旅行の紀行文『満韓とところどころ』が東京と大阪の『朝日新聞』に五十一回にわたって断続的に掲載された。新聞連載以外、「満韓の文明」、「満韓視察」、「韓満所感」、という三つの新聞評論が残り、漱石の日記にも関連する発言が数多く残されている。

『満韓』を構成する「満洲」と「韓国」という二つの言葉は、今までも固有名詞として日本社会に使用されているが、その地理概念としての定着が近代植民帝国の力による結果という事実はそれほど重視されていない。

本発表はまず、近代における「韓」という呼称の由来と変容を考察し、そのうえ、その変容を促した日本政府の意志を明らかにする。つぎに、「韓」という名称の変容期に完成された漱石の『満韓とところどころ』においても、「韓」に関連する言葉の使用状況を分類・集計し、そのような朝鮮の土地や民族を指す呼称が短期間で変容した事実を確認する。最後に、漱石の「文学的手法」が日本政府の「政治的手法」と同調していることを明らかにしたい。

唐代中期の季札評

文学研究科中国学専攻 博士前期課程二年 三木 啓介

春秋時代の呉の季札（季子）は、父と兄たちが譲ろうとした王位を受けなかった謙譲の人として名高い。そもそも呉は、周の太伯がその末弟に王位を譲るため、南方に移住したことが起源とされている。季札と太伯が王位を継がなかったことは、呉の歴史を彩る美談として、後世の史書や文学作品で伝えられていった。

しかし唐代中期に入ると、独孤及が「呉季子札論」を著して季札の讓位を強烈に批判した。また独孤及よりやや遅れて、季札批判への反論を記した蕭定「改修呉延陵季子廟記」、また独孤及とは異なる観点での季札批判を載せた権徳輿「志過」が著された。

上述した三つの文献はいずれも、なぜ太伯の讓位は呉の興隆をもたらしたのに、季札の讓位からほどなくして呉は滅んだのか、と問うたうえで季札への評価を述べている。これらの季札評は八世紀中期から後期にかけて成立しており、ほぼ同時代の人々が同じテーマで異なる評価をしている。うち独孤及「呉季子札論」は先行研究で両宋期への継承という観点で論じられているが、蕭定と権徳輿の論はそれほど注目されていない。そこで本発表では三人がどのように季札を評したかを論じ、唐代中期の歴史認識の一端を明らかにする。

明治期の漢詩人大江敬香について

——その「西詩体」を中心として

文学研究科中国学専攻 博士後期課程三年 胡 加貝

木下彪は著書『国分青厓と明治・大正・昭和の漢詩界』の中で末松謙澄と大江敬香が漢詩改良運動を起こしたことに言及している。筆者は主に末松謙澄について研究してきたが、漢詩改良運動の実作者としては末松謙澄以上に大江敬香の存在が大きかったと思われる。大江敬香については、三浦叶が「洋詩の漢詩訳―大江敬香の洋詩を主として」の中で大江の洋詩の漢訳について、村敬宇・末松謙澄・森鷗外・内田遠湖・柳井綱齋などと並べて紹介した。また、合山林太郎が『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』の中で大江の「平仄廃止論」について論じた。しかしながら、以上の先行研究では、明治詩壇で活躍していた大江敬香の詩学の素養、及びその試みた「西詩体」（森槐南の指摘）の特徴について殆ど触れられていない。本発表では『敬香遺集』に収録されている大江の詩作、及び『史海』などの雑誌に掲載された西詩体を取り上げて、前述した問題について考察したい。